

時評

**地震に負けない農業** 若者の労働力を農村に

静岡で地震—そう聞いてあわててあちこちメールした。幸い何人かがすぐ返信をくれたので事態が飲み込め少しは安心したが、それにしても報道には出ない被災は多岐に及んだことだろう。

私が気にしているのは農業への影響だ。東名高速の普通などはいやというほど取り上げられ関心も高いが、過疎地の農業に与えた影響などは、少なくとも全国ニュースでは流れてこない。

2004 年の新潟中越大地震では、棚田の崩壊、水田の液状化や、地域特産のコイの養殖池の崩壊などの被害が大きかったという。こうした被害では、その影響があとあとまで長く残る。コイの養殖池では、販売用のコイの生産もダメージを受けたが、それ以上に、次世代の品種改良に使う希少な種類の喪失が懸念された。

棚田にしても、コイの養殖池にしても、山間の農業はどこも零細だ。地震が起きると過疎地では高齢者が被災するため、それをきっかけに生産をやめてしまうケースも少なくない。高齢者が身寄りを頼って離村するケースがうち続くと、集落そのものの崩壊もおきかけない。

息も絶え絶えの「限界集落」は、災害にとくに脆弱である。そうすれば山間ではまだ山が荒れ、野生動物が跋扈し、何百年をかけて作られた文化的景観である里山が崩壊してゆく。日本の食料はますます輸入と大規模生産に頼らざるを得なくなり、山間の農業はさらに衰退する。これでは悪循環だし、だいいち地球環境にも悪い。

ではどうすればよいのか・私は、思い切って農村への移住を勧めたい。住宅団地を作るのではない。若い世代が農村に住まい、農業を営むのである。むろん「兼業農家」でよい。最初のうちは自分が食べる分を生産するだけでもよい。

誰がそんなことをするのか。いや、チャンスはある。あつたと言ふべきかもしれない。この大不景気で職を失った人が大勢いる。その労働力が村で農業を始める支援を、行政と地域が一丸となって進めればよい。私はこれこそ日本の社会構造を作りかえる千載一隅のチャンスになったのではないかと思う。

何やらめっちゃくちゃを言っているようにみえるかもしれないが、決してそうではない。文明史的なスケールで考えれば、中央に集中していた人口が地方に分散した時代はいくらかもある。日本列島でも縄文時代以来、人口の集中と分散は繰り返してきてきた。今はたぶん分散化が求められる時代だが、日本の政治は能動的に人口を分散化させるチャンスを見逃している。

農業を始めたところで、すぐに収入に結びつくわけでもない。食料がなくなってしかたなく都市を離れるのと、政策的にそうしむけるのとでは意味合いが異なる。だいたい今日を目の当たりにして「高速料金の値下げ」「無料化」というのもわかりやすい政策といえそうだが、さて、後世の人びとはこの政策をどう評価することになるのだろうか。